



Data

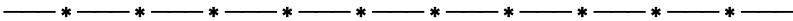
監督：三池崇史
 原作：沙村広明『無限の住人』（講談社『アフタヌーン』所載）
 脚本：大石哲也
 出演：木村拓哉／杉咲花／福士蒼汰
 ／市原隼人／満島真之介／市川海老蔵／戸田恵梨香／山崎努／田中泯／北村一輝
 ／栗山千明／山本陽子

👁️👁️ みどころ

人気漫画の実写化は難しいうえ、あの木村拓哉を「汚れ役」に起用するのはかなりの冒険。しかし、冒頭の「百人斬り」とクライマックスの「三百人斬り」の美学さえしっかり演じてくれば、成功は約束されたも同然・・・。

「血仙蟲」による不老不死の肉体というアイデアはストーリーを台無しにしてしまう危険もあるが、それをうまく活用した分、逸刀流のボスとその配下のNO. 2たちの存在感が薄くなったのが少し残念。

また、幕府の薄汚いやり口にもっと焦点をあてる「正攻法」もありだろうが、三池崇史監督流としては、もちろんこれでオーケー！



■□■三池崇史監督の時代劇は？人気漫画のポイントは？■□■

三池崇史監督の時代劇は、『十三人の刺客』（10年）（『シネマルーム25』201頁参照）、『一命』（11年）に続くもので期待大だが、本作は、沙村広明の人気マンガ『無限の住人』を実写化したものらしい。これは『月刊アフタヌーン』に1993年6月から2012年12月まで長期連載され、「むげにん」と略称された人気マンガで、独特の世界観を持ち、登場人物も多いらしい。そして、その最大のポイントは、木村拓哉演じる主人公・万次が「血仙蟲（けっせんちゅう）」を体内に宿しているため、不老不死の肉体を持ち、「死にたくても死ねない」孤高の主人公という点にあるらしい。なるほど、なるほど・・・。

キムタクこと木村拓哉は俳優として、現代劇では、『HERO』（07年）（『シネマルーム16』151頁参照）や『2046』（04年）（『シネマルーム5』359頁参照）等でもいい味を出していたし、時代劇でも『武士の一分（いちぶん）』（06年）（『シネマルーム

14』318頁参照)で見事な演技を見せていた。もっとも『武士の一分』では、徹頭徹尾カッコ良さが売りだったが、本作では冒頭から左腕を斬り落とされたり、片目を斬られたりと、散々な目にあわされるから、顔や身体に無数の傷跡をつけた姿で登場。しかも、衣装は初めから終わりまで同じ、汚れた(?)着流し姿だ。そんな原作のポイントはかなりマンガチックだが、面白そう。そして、そんなストーリーなら三池崇史監督は手際よく料理するのでは、と大いに期待!

■□■冒頭の「百人斬り」をどう見る?■□■

本作では、まず冒頭の万次(木村拓哉)による「百人斬り」の迫力に注目。このシーンでは、本当にきっちり100人を斬ったらしい。この「騒動」は、元同心であった万次が、私腹を肥やす旗本を斬った罪で妹と共に逃走していたところ、多くの手下を従えた賞金稼ぎに襲われたために起きたもの。言われるとおり、捕えられた妹・町(杉咲花)を返してもらうため刀を捨てたのに、賞金稼ぎの男は無慈悲にも妹を斬ってしまったため、怒りに燃えた万次はハチャメチャな勢いで、百人の敵に向かって突進していくことに。

『プライベート・ライアン』(98年)は冒頭十数分間の激しい戦闘シーンが売りだったが、本作でもこの冒頭の百人斬りのシーンは迫力満点だ。もっとも吉川英治の『宮本武蔵』を読み、内田吐夢監督、中村錦之助主演の『宮本武蔵 一乗寺の決斗』(61年)を観れば、刀で一人の人間を斬り殺すのは大変な作業だから、一人で大勢の吉岡勢と闘うについて、武蔵がいかに対一の状況を作り出して、相手を一人ずつ斬り殺すかに苦心したことがよくわかる。そんなリアルな「一对多数」の斬り合いを考えると、本作冒頭の「百人斬り」がいかに現実離れした荒唐無稽なものかは明らかだ。しかし、さすが木村拓哉、これはもちろん、斬られ役の俳優たちの協力を得ての話だが、その奮闘ぶりはお見事!

■□■女優・杉咲花の演技に注目!■□■

本作で、万次の実の妹・町役と百人斬りから50年後の今、父親・浅野虎藏の仇討を万次に依頼する虎藏の娘・浅野凜役を一人二役で演じているのが杉咲花。杉咲花は、『湯を沸かすほどの熱い愛』(16年)、『シネマルーム39』(28頁参照)で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を獲得した女優。さらに、私たちが毎年大阪で開催している「おおさかシネマフェスティバル」で、2015年度に新人女優賞を、2016年度に助演女優賞を受賞した新進女優だ。

その杉咲花演じる凜は、父親が江戸で営む無天一流の道場で男勝りの稽古をしていたが、その武術の腕前は?ちなみに、坂本龍馬が通った北辰一刀流の千葉道場では、千葉周作の娘・千葉佐那が相当の剣術の腕前を誇っていたから、それとの対比で凜の腕前に期待したが、本作では残念ながらその腕前も見せどころは一切なし。冒頭の百人斬りのシーンの後、謎の老婆八百比丘尼(山本陽子)の力(いらざるおせっかい?)によって不老不死の体と

なった万次は、その後なんの生き甲斐もないまま一人山奥で暮らしていたが、そこを凜が訪ねていくところから本作の本格的ストーリーが始まることになる。

浅野虎巖は、各流派の統合を目指す若きリーダー、逸刀流の天津影久（富士蒼汰）から、逸刀流グループの傘下に加わるか、それとも対決するかと迫られた挙げ句、あっけなく一対一の対決で敗北。それはそれで仕方がないが、母親が天津の部下たちの好きなようになぐさめものにされたうえ、死んでしまったから、凜は天津を仇として必ず殺すと誓ったが、何せ実力不足。そこで、凜は仇討ちのための助っ人として、八百比丘尼から万次を紹介されたわけだ。

杉咲花は、『湯を沸かすほどの熱い愛』では、母親役の宮沢りえを相手にいかにも今風の、学校でいじめを受ける女の子役を見事に演じていたが、さて、本作では？「勝負どころ」での、若干「叫び過ぎの演技」はイマイチだったが、そんな経験を重ねながら彼女がこれから今後一層成長していくことに期待したい。

■□■天津影久の野望は？その戦略は？そのNO.2たちは？■□■

本作冒頭に登場する万次は、今は完全なアウトローだが、幕府の同心だったのだから元は役人。それに対して、凜が両親の仇と狙う天津影久は、江戸の道場すべてを逸刀流の支配下に置くという野望のために邁進し、急速に勢力を拡大している剣客集団のリーダーだから、彼は幕府の役人ではなく、いわば在野の剣客だ。したがって、自分の収入を安定させ、また、逸刀流グループの財政を安定させるためには、幕府にその地位を認めさせ、柳生但馬守が率いた柳生一門のように幕府公認の剣術指南役として公認してもらうのが理想だ。そのため天津影久の雰囲気は一見アウトロー的だが、その行動原理はきわめて現実的。また、そのために天津影久が立てた戦略は幕府への売り込み（？）のようだから、本作中盤から後半にかけてみえてくる天津影久と幕府との各種かけひき（？）に注目！

他方、天津影久が凜の父親を一太刀で切り捨てる姿を見るとその腕前は超一流だし、孤高の存在としてそのカリスマ性は十分だから、そのNO. 2たちも実力者がひしめいているらしい。そのため、天津影久の命を狙う凜と万次の存在感が増していくにしたがって、万次と1対1で対決する天津影久のNO. 2である戸良（市原隼人）、凶闘斗（満島真之介）、乙橋慎絵（戸田恵梨香）たちが次々と登場してくるので、その対決ぶりに注目！その1対1の対決をみれば、万次とNO. 2たち一人一人の実力は拮抗しているようだが、なにせ万次は腕を斬られても腕は復活し、心臓を貫かれてもなお死なないのだから、そのハンディキャップは大きすぎる。したがって、その勝敗の行方が明らかかなことが少しずつ見えてくると・・・？

私は、本作の結末は万次と天津影久の決闘になるものと考えていたが、中盤のそんな展開が重なってくると、どうもクライマックスはそうではないような気が・・・。

■□■死ねないことの苦しみと虚しさは？■□■

冒頭の「百人斬り」の戦いで左腕を切り落とされた他、全身をメッタ斬りにされて、死の直前にあった万次に対して、「血仙蟲」を飲ませて不老不死の身体にしたのは、八百比丘尼婆だが、その婆が凜に対して万次を助っ人として紹介したのは一体なぜ？また、当初、万次が凜の話をまともに受けつけなかったのは当然だが、万次が凜の依頼を引き受け、以降万次と凜の疑似兄妹のような関係がどんどん深まっていくことになったのは一体なぜ？そこらあたりのストーリー構成は少し甘いが、本作では凜の天津に対する仇討ちの覚悟と万次の死んだ妹そっくりの容貌が万次の生きざまに大きな影響を与え、それが本作の底流を流れる人間ドラマになるので、それに注目！

万次は凜と出会い、自分に与えられた役割を自覚するまでは、八百比丘尼婆のおかげで自分が不老不死の肉体になったことを持て余していたらしい。これは、かつて秦の始皇帝が不老不死の薬を求めて部下の徐福を中国大陸の奥地西安から東海岸の蓬莱（現在の山東省）へ遣わした、という物語を聞けば贅沢な話。しかし、所詮人は何らかの目的がなければ生きていけない動物だということを本作はしっかり教えてくれる。もっとも、山田洋次監督ではなく、三池崇史監督がそんな人生訓を垂れるところに若干違和感を覚えたのは私だけ……。

■□■「三百人斬り」のクライマックスをどう見る？■□■

それはともかく、死ねないことの苦しみと虚しさを抱きながら一人孤独に生きていた万次が、今は凜の仇討ちを助けるために天津影久のNO. 2たちとの対決を続けていると、次第にその命の危険が迫ってくることに……。それは大ケガをして大量の血液が流れると、さすがに「血仙蟲」の働きが追いつかなくなるためだ。そして、そうなってくると万次は逆に早く「血仙蟲」が働き、命が回復することを期待するようになるから、おかしな話だ。つまり、万次は凜を守り、天津影久を倒すまでは死ねないと思い始めたわけだ。

そして、そんなことが、本作終盤に至って、幕府の裏切りのために、今幕府の役人（捕り物衆）達に一人囲まれている天津影久を万次が助けに行く理由になるらしい。戸田恵梨香演ずるNO. 2の乙橘楓絵は天津影久の恋人でもあったから、その愛のために、捕り物の場に駆けつけ、最後には自ら鉄砲玉の前に飛び出して天津影久の命を救ったのは当然だが、万次がこの捕り物の舞台に登場したのは一体なぜ？本作にみる万次のそこらあたりの「美学」をあなたはどうか解釈？それをしっかり考えながら、本作のクライマックスとなる、いかにも「これぞ、三池崇史監督流の美学！」と実感できる「三百人斬り」の圧倒的迫力を楽しみたい。

2017（平成29）年5月11日記